

研究ノート

実習指導者講習会フォローアップ研修の効果的在り方 — フォームを活用した実習指導事例の分析 —



沖野 良枝¹⁾、牧野 恵子²⁾、藤井 淑子²⁾、谷口 智子³⁾、⁴⁾大角 光子⁴⁾

¹⁾滋賀県立大学人間看護部

²⁾滋賀県看護協会

³⁾大津市民病院付属看護専門学校

⁴⁾大津赤十字看護専門学校

背景 平成20年、実習指導者講習会効果の持続・発展を意図し、A県においてフォローアップ研修を試行し、研修のニーズと実施の効果が検証された。しかし、分科会の評価は60%と予想に反して低いものであったことから、テーマとプログラムの焦点化、ワークの実際的な方法が示唆された。そこで、平成21年度は経験交流や情報交換を基本にしながら、実習指導者講習会での学習を踏襲し、より具体的で実践へのフィードバック可能な研修の在り方を探り、コミュニケーションにかんする講演と事例検討の方法論を試用した。

目的 講習会効果の持続・発展および実習指導者の指導技術のレベルアップを意図した研修において、継続教育としての講演と分析フォームを試用した事例検討による実践の振り返りとしての効果を検証する。

方法 対象：A県実習指導者講習会受講者で、実習指導担当中の研修参加者55名。

時期：平成20年8月～21年3月

内容：講演とワークショップを内容とした実習指導者講習会後のフォローアップ研修の実施とその効果の検証。

分析：信頼性分析、5段階評定の記述統計、自由記述のカテゴリー化。相関分析による質問項目間の関連、重回帰分析による事例分析への関心度と満足度の要因探索。

結果 ワークショップの参加者55名の内、質問紙の有効回答数(率)は、研修前52名(94%)、研修後53名(96%)であった。講演に対しては、関心と活用可能感、満足度は5および4レベルが78～80%と非常に高く評価された。分析フォーム「全体」の効果では、61%が肯定的評価を示し、「学生だけでなく自分自身や環境を多面的に見ることに繋がった」ことが挙げられた。「分析フォームを活用したい気持ち」は55%、実際に「活用してやれそうな気持ち」になると、13%と低い評価となった。

「講演に対する満足度」には「新しい知識の獲得」が82%寄与していることが示され、「ワークショップに対する満足度」には、「グループでの情報交換」「事例分析への関心」が73%の寄与率で関連していることが探索された。

結論 コミュニケーションスキルに関する講演に対して、約90%が高い満足度と今後の活用感を示し、満足度には「新しい知識を得た」ことなどが関連している点から、継続教育としての研修の効果が明らかになった。また、フォームの試用による事例分析に対しては60%が満足を示し、「情報の整理ができる」「アセスメントや問題点が偏らない」「指導の具体策まで導き出せる」などの効果が述べられた。しかし、「活用への自信や可能性」は低い評価であり、時間がかかる事などが指摘され、今後の検討課題が示唆された。

キーワード 臨地実習、実習指導者、実習指導者講習会フォローアップ研修、事例分析フォーム

2009年9月30日受付、2010年1月9日受理

連絡先：沖野 良枝

滋賀県立大学人間看護学部

住所：彦根市八坂町2500

e-mail：y-okino@nurse.usp.ac.jp

I. 緒言

実習指導者講習会（以後、講習会と述べる。）は、受講者が看護教育における実習の意義、実習指導者（以後、指導者と述べる。）の役割を理解し、効果的な実習指導を可能にするために必要な知識・技術の修得を目的として実施されている¹⁾。特に、受講者が修得した知識、技術をその後の指導にどの様に活用しているか、講習終了時の意識や意欲、指導力がどのように維持・発展しているのかを把握することは、教育側の関心と同時に講習会の評価としても重要である²⁾。講習会の効果を維持、発展させるためには指導を継続する、指導者自身も成功体験をすることが必須要件であるが、さらに、その体験を指導者としての意識や能力の向上に深化させるものとして、フォローアップの機会は欠かせないと考える。

しかし、現在の講習会規定やシステムではそうした機会を持つことは困難であり、またこれまで、必要性の指摘はありながら³⁾ 実践の報告は見られなかった。

研究者らは平成20年、講習会効果の持続・発展を意図し、A県においてフォローアップ研修（以後、研修と述べる。）を試行した。その結果、研修開催について90%が適切と回答し、80%の参加満足度が得られ、講習会後の研修のニーズと実施の効果が検証された⁴⁾。しかし、研修の評価はプログラムの内容により差が示された。講演による再教育に対しては、81%が高い満足度を示したが、分科会での経験交流や情報交換に対しては、60%に低下していた。これは、分科会参加者の関心やニーズのずれに加えて、参加者数、討議内容、進め方、討議時間などが影響したものと考えられ、対象の特性と構成数に適したテーマとプログラムの焦点化が示唆された⁵⁾。そこで、平成21年度は経験交流や情報交換を基本にしながら、より具体的で実践へのフィードバック可能な研修の在り方を探った。

臨地実習においては、学生が円滑に実習を進め、学びを深め看護者としての知識、技術、人間関係の在り方を修得することにより、教育効果を上げることが求められる。そのためには実習指導者の教育的介入はとりわけ重要である。しかし、学生が実習の過程で悩み、つまずき、また、指導者が指導上の困難を感じる時、学生側、指導者側共に個別の問題に対する適切な解決策を導き出すための確立した方法論は少ない。そこで、研究者らはそうした指導上の問題を発見し解決するための問題解決能力や指導技術のスキルアップを意図し、事例検討を支援する方法として独自に事例分析フォームを作成した。フォームは、講習会において習得した実習指導のコア概念としての教材観、学生観、指導観に環境的要素を含めた内容を基に、問題解決技法による展開で構成したもので、そのフォームを用いたワークショップを企画した。本研究

は、講習会効果の持続・発展および実習指導者の指導技術のレベルアップを意図した研修において、継続教育としての講演と分析フォームを試用した事例検討による実践の振り返りとしての効果を検証することを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究デザインと仮説

研究デザインは、講習会効果の維持・発展を意図したフォローアップ研修の実施とその効果を検証する量的記述研究とした。

研究仮説は次のように設定した。

- (1) 継続教育としてのコミュニケーションスキルの講演に対する参加者の満足度は高い。
- (2) 総合的、系統的な問題解決技法を枠組みとした事例分析フォームを活用した事例検討は効果的である。

2. 対象

A県実習指導者講習会受講者で、実習指導担当中の研修参加者55名

3. 時期

平成20年8月～21年3月

4. 内容

実習指導者講習会後のフォローアップ研修の実施とその効果の検証

- 1) 研修目的：講習会後の継続教育および実習指導の振り返りと評価
- 2) 研修内容：
 - 講演（2時間30分）；「『？』から始まる学生理解とコミュニケーション」
ねらい；指導技術の向上を目的とした継続教育
 - ワークショップ（3時間30分）；「事例から振り返る実習指導の視点」
ねらい；指導事例の振り返りと評価、指導技術の向上

5. ワークショップについて

- 1) 方法：事例検討ツールとしての事例分析フォームを作成して、その試用により有用性を検証。
- 2) 進め方：ガイダンス（30分）；事例分析フォーム、分析の進め方
グループワーク（120分）；事例展開
全体報告会（60分）；まとめ、学習の共有
- 3) 事例分析フォームの作成
講習会カリキュラム内容¹⁾、文献検討⁶⁾⁻⁹⁾ から

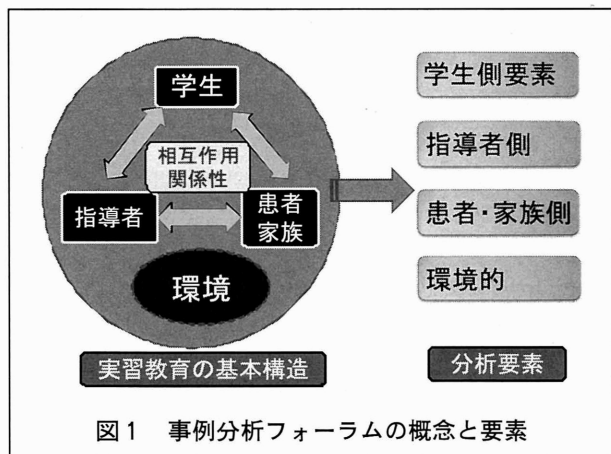


図1 事例分析フォーラムの概念と要素

得られた概念としての実習教育は、「学生」「指導者」「患者」「人的・物的環境」を構成要素とし、要素間機能を「関係性」と「相互作用」にあると想定した(図1参照)。いわゆる、学生観、看護観を含む指導観、教材観、人的・物的条件に該当するものである。この要素を具体的、状況的な因子までに拡張したものを分析用マトリックスとし(表1)、これを、分析時のデータベースに位置付けた。さらに、

アセスメント(要素内判断・要素間関連性、問題状況)、対応策(目標・望ましい状況、指導方法)を加え問題解決技法としての系統的、総合的事例分析フォームを作成した(表2)。

6. 効果の検証

分析フォームに関する質問紙調査による。

1) 質問紙

①「研修前」質問紙は、参加予定者の施設看護部の協

表1 分析用マトリックスの概要

[学生側の要素]	[患者側の要素]
レディネス： 学習動機、関心、目標、主体性 属性： 年齢、性別、性格傾向、健康 コミュニケーション力： 表現、関係成立	疾患、治療： 合併症、心理状態 属性： 年齢、性別、性格傾向 コミュニケーション力： 家族の状況・ニーズ
[指導者側の要素]	[環境的要素]
教育・指導方法： 看護・指導観、意欲 学生観： 学生理解、関心、態度 属性： 年齢、性別、性格傾向、健康 コミュニケーション力： 表現、傾聴力	病棟の特性： チーム・ワーク 実習の受け入れ： 関心、理解 教員・指導者の関係と連携 必要な設備、物品

表2 事例分析フォーム

データベース		アセスメント		目標・計画	
実習指導の構成要素	事例の状況	アセスメント(要素内判断・関連性等)	アセスメント(問題状況)	対応策(目標・望ましい状況)	対応策(指導方法)
[学生側の要素] レディネス ・学習動機(内発的、外発的) ・看護に対する興味・関心 ・主体性、積極的、意欲 ・学習態度(学年、底習実習) ・学習目標・課題の明確化 ・知識、技術、論理力レベル 属性 ・年齢、性別、性格傾向 ・健康状態 コミュニケーション ・表現力 ・人間関係、グループ関係					
[指導者側の要素] 指導方法 ・看護観、指導観 ・指導への動機、意欲 ・実習目標・課題の確認 ・指導技術、方法 ・指導案の作成、活用 ・モデリング 学生観 ・学生に関する理解 ・学生への関心、態度 属性 ・年齢、性別、性格傾向 ・健康状態 コミュニケーション力 ・表現力、傾聴力、調整力 ・人間関係					
[患者側の要素] 疾患、治療 ・病名、症状、経過、治療 ・合併症、心理状態 属性 ・年齢、性別、性格傾向 コミュニケーション力 家族の状況・ニーズ					
[環境的要素] 病棟の特性 ・診療科、ベッド数、診療体制 ・看護体制、方式 ・チームワーク 実習の受け入れ ・スタッフの関心、雰囲気 ・指導者への理解・協力 ・指導者の指導の専任・兼任 ・勤務上の配慮 教員・指導者の関係と連携体制 他職種との関係 必要な設備、物品					

力を得て、研修前に配布し、研修当日回収箱への投函により回収した。

- ②「研修時」質問紙は、研修当日参加者に配布し、講演、ワークショップ、研修終了時に投函により回収した。

ワークショップに関する質問紙は、以下の内容で研究者らが作成した。

①「研修前」の意識

参加動機、関心の程度、講習会後の指導への関心や意欲、指導向上への自身の努力など指導に関する意識状態を問う4項目。

②事例分析フォームの活用性に関する評価

事例分析への関心度、分析フォームを活用したい気持ち、フォームを活用してやれそうな気持、今後の活用可能性を問う4項目。

③事例分析フォームに対する評価

ワークショップ内容の理解、「マトリックス」部分の効果、「アセスメント」部分の効果、「対応策」部分の効果、「フォーム全体」の効果等を問う5項目。

④ワークショップ参加に対する評価

グループ討議への参加度、討議での意見交換の程度、討議での情報交換の程度、参加満足度を問う4項目。

⑤「研修終了時」の意識状態の把握

指導意欲や関心の変化、向上への意思、有用な示唆、今後の指導への有益性を問う4項目。

2) 回答方法

SD法による5段階評定(5:高い⇔1:低い)及び一部記述式。SD法では5段階数値の高い得点を肯定的、

低い得点を否定的な格付けとした。質問紙は無記名自己記入式で行った。

7. 分析

信頼性分析、5段階評定の記述統計、自由記述のカテゴリ化。相関分析による質問項目間の関連、重回帰分析(ステップワイズ法)による事例分析への関心度と満足度の要因探索。分析には、SPSS17.0 for windowsを使用した。有意水準は1%とした。

8. 倫理的配慮

臨床研究に関する倫理指針(厚生労働省、平成16年改訂)に基づき、研修参加者に研究の目的と概要、質問調査について文書で説明し、次の点を周知し協力を得た。自由意思による任意の参加、同意後の自由な撤回、質問紙の投函による同意の意思表示、無記名自己記入式調査、データの集計・解析は集団処理、個人データの管理と結果の報告、研究終了後のデータ処分。

なお、本研究は、A県看護協会長の許諾を得ている。

III. 結果

1. 質問紙回答者およびその属性

ワークショップの参加者は55名であった。その内、質問紙の有効回答数(率)は、研修前52名(94%)、研修後53名(96%)であった。参加回答者の属性については、表3に示したが、男性2名、女性50名、NA1名、平均36.6(±5.2)歳であった。講習会受講年度については、表4に示した。

2. 研修前の意識状態

今回の研修の参加動機は、複数回答の中で「自分自身

表3 回答者の属性

N:研修前52名, 後53名

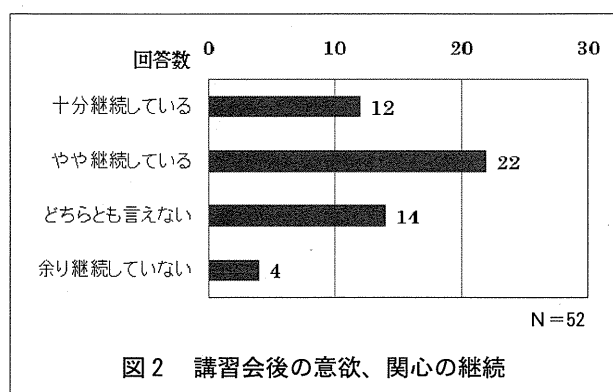
回答時期	性別 (%)		年齢 (SD)		
	女性	男性	最小	最高	平均
研修前	49名 (94.2)	2名 (3.8)	28歳	50歳	36.5(4.9)歳
研修後	50名 (94.3)	2名 (3.8)	28歳	61歳	36.6(5.2)歳

表4 講習会受講年度

年度	13	14	15	16	17	18	19	20	無回答	合計
人数	5	2	2	0	5	3	5	27	4	53
%	9.4	3.8	3.8	0	9.4	5.7	9.4	50.9	7.5	100.0

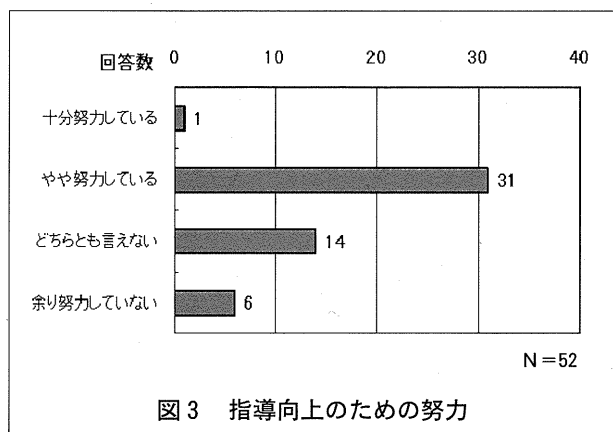
表5 講習会後の指導意欲の継続要因

講習会後の指導意欲の継続要因 (自由記述) (N=29名)		継続していない要因 (自由記述) (N=3名)	
カテゴリー	コード数	カテゴリー	コード数
・学生の反応や成長により得られる自身の学び	8	・相談できる人がいない	1
・実際に指導にかかわっている	5	・学生への対応や指導の仕方がわからない	1
・良い指導をしたい	5	・業務が忙しく、気持ちが付いていない	1
・指導経験が浅く、関心が継続している	4	・指導者が1人なので、休みが取れない	1
・講習会の内容が實際上、有効である	4		
・講習会での学びが振り返りに効果的	4		
・指導者の役割遂行に、周囲が協力的である	4		
・学生を看護の継承者、仲間として信じる	2		
・実習指導が楽しい、好きである	2		



の関心」の割合が20%であり、「自ら参加を申し出た」人も17%みられたことから、関心を持った自発的参加意識が高いことが示された。また、「他施設の人との交流」や「新しい知識を得る」など情報や経験交流による指導技術の向上を期待する積極的な学習動機が26%回答されていた。

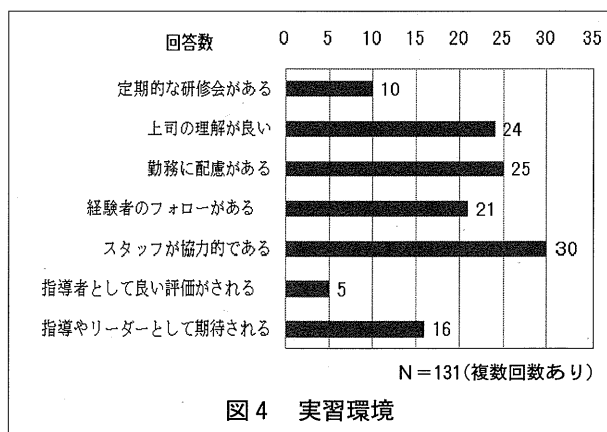
講習会後の実習指導に対する意欲や関心など意識の状態を「研修前」の回答より把握し図2に示した。また、意欲や関心が継続していると回答した人は、ややも含めて34人であった。継続に関する要因について、自由記述



をカテゴライズし表5に示した。講習会で学んだ内容が活用でき、学生指導により相互の成長に気づき楽しさを感じていることが挙げられた。逆に継続できていないのは、相談できる人がいないことや業務の忙しさが要因であった。また、指導向上のために、32人が自身で努力をしていると回答している(図3)。努力の内容として、教員や先輩看護師、他病棟の指導者と話し合う機会を持ち指導の振り返りを行っている者が最も多く、その他研修会への参加や雑誌や本を読むと回答している者もいた。実習指導の環境について図4に示したが、「スタッフが協力的」であるが最も多く、「勤務に配慮がある」「上司の理解が良い」「指導やリーダーとして期待される」「定期的な研修の機会がある」「指導者としてよい評価がされる」との回答が得られた。

3. 講演に関する評価

講演に対する質問紙の評価を図5に示した。関心と活用可能感、満足度は5および4レベルが78~80%と非常に高く評価された。「実際のわかりやすい」「具体的事例のロールプレイが参考になる」「活用可能である」などの記述を表6に示した。



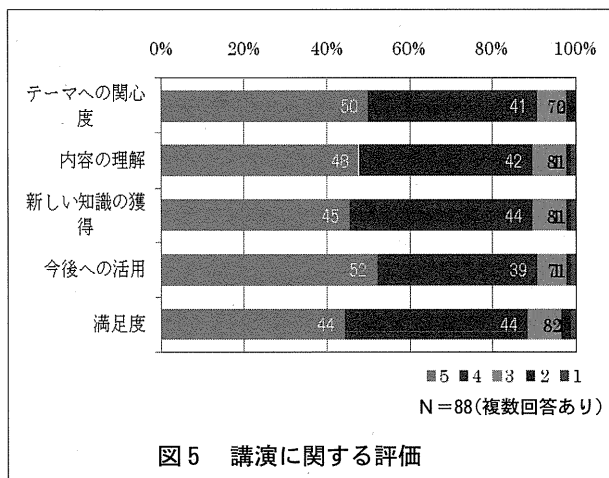


表6 講演および事例分析ワークショップに対する評価

(N=53名)

質問内容	高評価(5,4)割合 (%)	特に評価できる点 (自由記述)	評価できない点
講演に対する満足度	92	<ul style="list-style-type: none"> ・ 实际的でわかりやすい ・ 具体的事例のロールプレイが参考になる ・ 活用可能である ・ 関わり方を模索していきたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間が不足
ワークショップの内容理解	68	<ul style="list-style-type: none"> ・ 問題分析の重要性の理解 ・ 実習教育の基本構造の理解 ・ 多面的、相互関係の視点で捉える ・ 事例の分析方法 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 分析する時間が不十分 ・ フォームの理解、活用にかかる時間がかかる
「マトリックス」部分の効果	62	<ul style="list-style-type: none"> ・ 分析を深めるうえで重要 ・ 実習状況の把握と理解が深まる ・ 多方面から細かく分析できる ・ 細かい部分の記入により状況やアセスメントができる ・ 項目に分けることで問題が明確化する ・ 事例が整理しやすい ・ 優秀な学生でも分析により早期に問題抽出ができ解決しやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 重複記載部分が多い ・ 討議内容の記述が難しい
「アセスメント」部分の効果	62	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報が整理しやすい ・ 客観的にアセスメントできる ・ 項目ごとにアセスメントすることで具体的な考察ができる ・ 問題点が多角的視点から明確になる ・ アセスメントから対応策の出し方 ・ 看護計画につながる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 書き方の統一が必要 ・ アセスメントの2分類の理解が難しい
「対応策」部分の効果	70	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4要素の明確化により対応が具体的に ・ 多方面からの対応が全てリンクする ・ 学生への接し方がわかる ・ アセスメントからの対応策の出し方 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対応策の2分類が難しい ・ 目標の主体が混乱する
「フォーム全体」の効果	61	<ul style="list-style-type: none"> ・ 書面に起こすことで整理できる ・ 学生のみでなく自分や環境を多面的に見ることに繋がる ・ 問題点が偏らない ・ 実践可能な策が進みだせる 	記述なし
事例分析への関心	72	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多面的、客観的な視点の確保 ・ 現場でも看護を見直す必要がある ・ 分析により学生や対象の理解が深まる ・ 問題解決思考を適応する効果 ・ 問題の早期発見、対応の可能性 ・ 具体的に分かりやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 用語の理解が難しい ・ 事例の情報が不十分
フォームを活用したい気持ち	55	<ul style="list-style-type: none"> ・ 早期の指導介入に役立つ ・ 指導の振り返りのため ・ 問題に直面したとき ・ 経過がわかりやすい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 時間がかかる ・ 面倒
今後への活用可能性	39	<ul style="list-style-type: none"> ・ 視点がずれることなく分析できる ・ 個別的指導方法を考えられる ・ 指導中の振り返りの時 ・ 実習指導者学習会で活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現場での活用には時間が足りない
ワークショップ参加満足度	60	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他の人の意見や考えが聞けて学びを得た ・ 色んな方向から考えることができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 十分まとめ切れなかった ・ 時間が足りなかった

4. 分析フォームを活用した事例分析に関する評価

事例分析に関する17質問項目に対するCronbach標準化 α 係数は0.911であり、内的整合性は得られた。

1) 事例分析フォームに対する評価

各質問に対する結果を図6に示した。「ワークショップの内容理解」では、5、4レベルの評価が68%得られ、特に理解できた内容、理解できなかった内容を表6にまとめた。

「事例の分析方法」「学生側だけの問題のとらえ方ではなく指導者や環境面から考える必要性」「4要素から考えること」「全ての構成要素ごとのアセスメントと対策が重要」「4要素が相互作用している」が述べられていた。「『マトリックス』部分の効果」では、5、4レベルの評価は62%得られ、その効果的な点として「優秀な学生でも問題分析により早期に問題抽出ができ解決しやすい」「今後も実習で使用できる」「事例が整理しやすい」

「項目に分けることで問題が明確化する」「情報を共有しさらに発展しアセスメントできる」「細かい部分の記入をすることで状況やアセスメントができる」であった。「『アセスメント』部分の効果」では、5、4レベルの評価は62%、効果的な点として「客観的にアセスメントできてよい」「情報が整理しやすい」「問題点が明確になる」「実習指導中に患者別の要素や環境要素はアセスメントする機会がないためよかった」「看護計画につながった」などであった。「『対応策』部分の効果」の5、4レベルの評価は70%、効果的な点では、「4要素が明確になることで対応策が具体的に」「学生への接し方がわかった」などであった。「分析フォーム『全体』の効果」では、5、4レベルの評価は61%、特に効果的な点は、「書面に起こすことで整理できる」「学生だけでなく自分自身や環境を多面的に見ることに繋がった」であった。また、全体的に「他者の意見が聞けてよかった」との記述が得られ、自己の考え方の確認や実習指導をおこなっている他者の考えを聴くことでグループワー

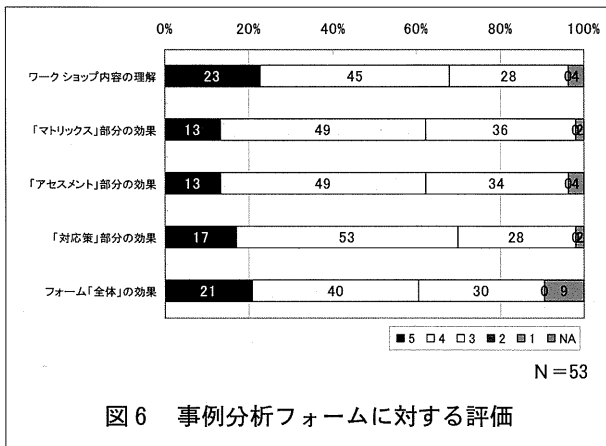


図6 事例分析フォームに対する評価

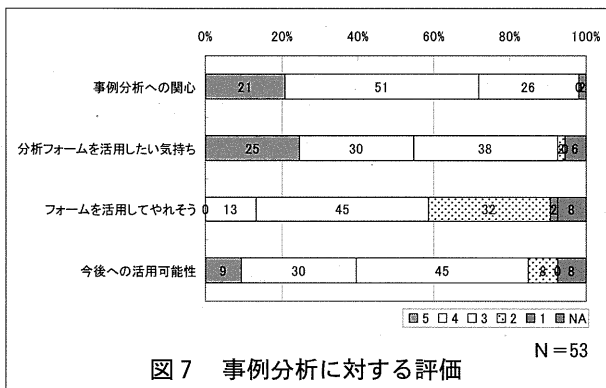


図7 事例分析に対する評価

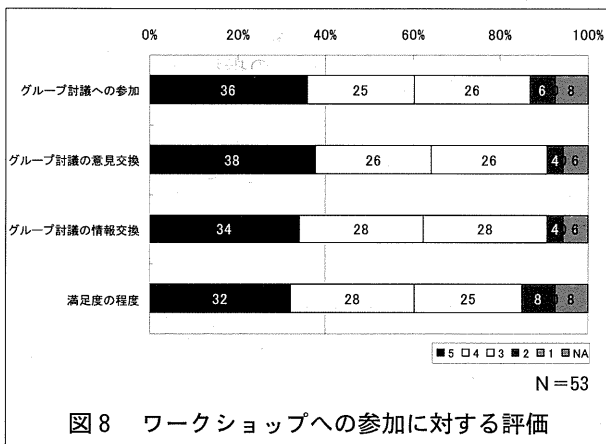


図8 ワークショップへの参加に対する評価

クに対する評価が示されたと考える。全体的に効果がない点として「分析に時間がかかる」「方法の理解に時間がかかる」「重複して書くのが大変」との意見が見られた。

2) フォームの活用による事例分析に対する評価

質問項目の回答結果は図7、表6に示した。「事例分析への関心」の程度は、5および4レベル合わせて72%と高い反応が得られた。今回の事例分析に特に関心をもつ

た点として「多面的、客観的な視点の確保」、「問題解決思考の効果」、「問題の早期発見、早期対応の可能性」、「学生理解が深まる」などが述べられていた。また、「分析フォームを活用したい気持ち」は55%と回答されたが、実際に「活用してやれそうな気持ち」になると、5および4レベル合わせて13%、3が45%と低い評価となった。特に活用したい点として、「早期の指導、介入に有用」「経過の把握」「悩んでいる時の対応策」などが回答されていた。また、「今後の活用可能性」は5および4レベル39%であった。実際に活用できる点として「分析視点の明確化、焦点化」「個別指導の振り返り手法」「問題状況の解決方法」が述べられていた。また、活用できない理由は「活用する時間が無い」「活用には時間がかかり過ぎる」であった。

3) ワークショップへの参加に関する評価

ワークショップへの参加状態について図8、表6に示した。グループ討議への参加について61%が5および4レベルの回答を示した。その中での意見交換64%、情報交換62%と高い評価であり、グループワークへの満足度については60%が5および4の評価をしていた。特に満足できた点として、「他の人の意見や考えが聞けて学びを得た」「いろいろな方向から考えることができた」ことが述べられていた。不満な点は、「時間が足りなかった」であった。

5. 研修後の意識状態

研修後の参加者の意識状態を、図9に示した。研修を体験することにより、「意欲や関心の変化が見られた」とする回答が5および4レベル合わせて87%、「指導への努力をする気持ちが高まった」との回答が91%と高い割合を示した。また「実習指導に関する示唆を得た」90%、「今後の実習指導に役立つ」については、94%であった。

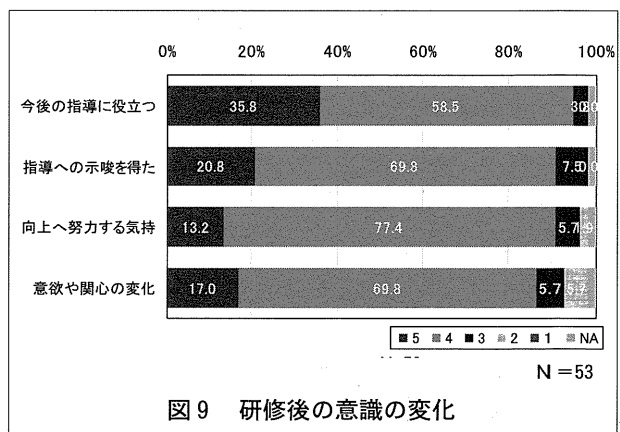


図9 研修後の意識の変化

表7 「事例分析・フォーム」に対する評価間の相関

(Spearmanの ρ 、N=53)

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
①関心度	1.000								
②活用したい気持ち	.692**	1.000							
③活用してやれそう	-.412**	-.300**	1.000						
④活用可能性	.414**	.674**	-.132	1.000					
⑤内容の理解	.808**	.599**	-.275	.377**	1.000				
⑥「マトリックス」	.673**	.659**	-.206	.443**	.600**	1.000			
⑦「アセスメント」	.701**	.582**	-.337*	.280	.585**	.717**	1.000		
⑧「対応策」	.655**	.586**	-.309*	.314*	.589**	.661**	.766**	1.000	
⑨「フォーム」	.679**	.581**	-.229	.342*	.657**	.726**	.843**	.782**	1.000

6. 講演、事例分析に対する評価意識に関連する要因の探索

事例分析に対する参加者の評価意識に関連する要因を探索するために、相関分析 (Spearmanの ρ) を行い、表7に示した。「ワークショップ全体の内容理解」については、「事例分析への関心」が強く関連していた ($r_s = .808, p < .01$)。また、「事例分析への関心」には、「アセスメント部分の効果」と「フォームを活用してみたい気持ち」が強く関連していた ($r_s = .701, p < .01$) ($r_s = .692, p < .01$)。「マトリックス部分の効果」は「アセスメント部分の効果」と ($r_s = .717, p < .01$)、「アセスメント部分の効果」は「対応策」と ($r_s = .766, p < .01$)、さらに、「対応策部分」は「フォーム全体」と強い関連を示していた ($r_s = .782, p < .01$)。

「講演に対する満足度」および「事例分析への関心」、グループワークに対する「満足度」に関連する要因を探索した。その結果、「講演に対する満足度」には「新しい知識の獲得」が82%寄与していることが示された ($R^2 = .822, SE = .378, F = 190.9, P < .01$)。

「事例分析への関心」には、「ワークショップ全体の内容理解」、「アセスメント部分の効果」、「グループ討議への参加度」の3因子による71%の寄与が示された ($R^2 = .706, SE = .380, F = 36.2, P < .01$)。また、ワークショップに対する満足度には、「グループでの情報交換」「事例分析への関心」が73%の寄与率で関連していた ($R^2 = .729, SE = .507, F = 58.7, P < .01$)。

IV. 考察

1. 研修会前の指導に関する意識状態

研修の参加動機は、複数回答の中で「自分自身の関心」の割合が20%であり、「自ら参加を申し出た」人も17%みられたことから、関心を持った自発的参加意識が高いことが示された。また、「他施設の人との交流」や「新しい知識を得る」など情報や経験交流による指導技術の

向上を期待する積極的な学習動機が26%回答されていた。この傾向は、前年度研修の反省から、今回の対象を現在指導中の人に絞り、ニーズの焦点化を図ったこと、また、参加者の半数が20年度の受講者であったことが、こうしたニーズを高めていたと考えられる。講習会後の指導への意欲や関心の継続については、ややも含めて65%の人は継続していると回答していた。ここ数年間の受講者が大半で、現在、指導中であることから、講習会での学習内容が現実には活かされる機会が多いこと、実際の指導を通して自身も学びや気付きを深め、教えることの楽しさや喜び、役割意識の認識が維持できていると考えられる。

指導者講習会の効果を維持、発展させるためには、指導が継続され、評価され、指導者としてスキルアップしていく努力の機会が必要であると改めて気付かされる。特に、指導を担当し始め、自分の指導に対する不安や自信の欠如など動揺や混乱の生じやすい早期の段階で、フレッシュな再教育、経験者や同じ受講者からの情報提供やアドバイスの機会は非常に効果的だと考える。

2. 講演「コミュニケーションスキル」に対する評価

今回の講演内容は、困難と言われる最近の学生理解と関係をより円滑に進めるためのコミュニケーションスキルの学習、修得を目的とした再教育に絞った。実習指導者は学生の指導、患者のケア、関連スタッフとの関係調整など殆どの場合に有効なコミュニケーション手段を活用することが求められる。しかし、希薄な主体性、感情的、自己中心など最近の学生の言動は理解し難く、指導に自信が持てないと悩む人は多くみられる。講演では、このような若者を好意的に理解し、上手に付き合う様々なコミュニケーションスキルの基本と応用について学び、今後の学生理解をさらに深め、指導内容の改善に繋がることを期待した。経験豊富な講師による具体的で分かり易い実践的スキルの提示は受講者の評価に見られるように、関心と活用可能感、満足度は非常に高く評価された。今後の実習指導に対する振り返り、学生などとの関係作

りへの具体的な示唆など適切で有益な内容であった。また、満足度に関連する要因は、新しい知識の活用であったことは、継続教育としての研修効果を検証するものと考えられた。

3. 事例分析フォームを活用した事例検討に対する評価

対象を指導担当中の指導者に限定しテーマや課題を焦点化することが、より有益な意見交換や適切な議論の展開を可能にするとした前回の課題を踏まえ、参加対象を現在指導中の人限定した結果、ワークショップにおいても、予想以上に有益な討議と学習を展開することが出来た。また、講習会での学習内容を基本要素にした、分かり易く、多面的、総合的視点で効率的に問題解決思考を展開できる事例分析フォームを活用しての事例展開の試みは、例え個別の事例が示す問題であっても、事例個人の状況や、指導者・学生間の問題として対応するのではなく、実習教育に関わる多様な側面から相互関連的に考えることが、問題を教育の視点から望ましい方向で解決し、教育環境を整えるために重要であるとの意図からであった。

ワークショップでは、分析フォームと分析の進め方に関するガイダンスの後、グループ作業に入ったが、議論や分析の展開は円滑に進められた。受講者のフォームに対する評価は、分析フォームの内容や活用を含めて、63～70%の肯定的評価が得られた。これは、講習会で修得した教育・指導理論や日常的問題解決思考を構成要素に取り入れた効果によるものと考えられた。特に、参加者の70%以上が今回の事例分析への高い関心を示し、特に4構成要素からの具体的、多角的な視点、理解しやすい問題解決思考による展開、問題の早期発見、早期対応の可能性などが高い関心につながったことが考えられた。しかし、フォームを活用したい気持ちは55%であり、やれそうな効力感は13%、半数は中間的評価に留まった。また、活用可能性があると考えている人は40%と低い反応であった。この結果からは、関心はあり活用してみたい気持ちはあるが、活用するには自信が無い。しかし、活用できる可能性は有ると考えていることが推測できた。前年度の研修において、高く示された満足度に影響する主な因子は、研修内容の活用可能性であった⁹⁾。フォローアップ研修の効果的在り方の要件として、実践への活用可能性は重要であると考えられるが、今回の事例分析の方法には、その点で課題が示されたと言える。

活用できない理由として書かれていた、「方法の理解に時間がかかる」「重複して書くのが大変」「活用の時間が無い」との意見があり、進め方や要素項目の検討など総合的で迅速、簡便さの追求が今後の具体的な改善の方向性を示唆していると考えられたが、今回はフォームの

初回使用である、マトリックスの因子数が多い、全プロセス記述式である、グループワークでの協議や意見交換などの作業であったことなども要因と考えられた。

実習指導者の個別の学生に対する指導的関わりは、実習期間2～3週間の非常に限られた時間のしかも、一回限りの関わりになる。その間に不安や悩み、混乱に陥った学生に対して、いかに効果的な個別指導を進め、学習を保証していくのか、指導者自身の厳しい課題でもある。そうした課題に対して、迅速に対応でき、通常の使い慣れた思考回路や方法論を無理なく活用し、客観的で学生個人の要素に偏らない総合的な視点からの問題分析と解決の検討は、今後、益々必要になると考えられる。今回の結果から、短い実習期間、複雑な指導状況下でもより迅速、簡便に問題点や対応策の確認が可能となるように、要素内因子の精選、より効率的手順、トレーニングなど今後の検討課題を得ることができた。

ワークショップでの参加状況に対する5、4レベルの評価は60～65%であった。他者との意見交換や多様な考えを得ることに拠る振り返りが出来、満足度は61%得られた。この満足度には、グループでの情報交換や事例分析への関心が73%寄与していることが示され、経験交流と評価と言うフォローアップの目的は達成できたと考えられる。

4. フォローアップ研修全般に関して

フォローアップ研修全般に関する評価として、受講者の指導への意欲や関心の変化が86%はあったと回答している。また、94%が今後の指導に役立つと高い評価が回答されている。このことから、講演も含め今回、具体的な学生への関わり方、学生の問題へのアプローチの視点を学習したことで、今後の指導技術のレベルアップに繋がっていく可能性が期待できる。特に学生指導を担当し始め、学生とのかかわりの中で困った場面を想起しながら事例検討に参加し、情報交換・意見交換することにより自己の問題解決の糸口がつかめたとの記述も得られ、指導開始後早い時期に、悩みや問題解決の方向性や指導の振り返り、評価の機会を得ることが指導の安定、継続や向上に繋がることが推測できる。

指導者は効果的な指導を実施するために、講習会において教育理論、学生理解、指導方法、指導案に添った指導の進め方などを修得し、その後、指導を実践する。その指導が講習会で修得した内容を反映した効果的なものか否か振り返り評価する。その評価をより教育的、専門的なものに深化するためには、他者からのクリティカルな視点が加わることが重要である。そうした評価や意見交換の機会が一定のシステムとして提供されることで、指導経験は蓄積され、持続・発展させることが出来ると考えられる。そうしたプロセスを保証する一ステップの

表8 フォローアップ研修の評価と課題

開催	目的	内容	評価	課題	
第1回	継続教育	講演：指導の方法論	今後の活用 満足度	77% 81%	実際への活用
	経験交流、情報交換	テーマ別 分科会：交流	今後の活用 満足度	71% 61%	実際への活用 ニーズの充足
第2回	継続教育、スキルアップ	講演：コミュニケーションスキル	今後の活用 満足度	91% 92%	時間の確保 トレーニング
	指導振り返り、スキルアップ、評価	ワークショップ：事例検討	今後の活用 満足度	39% 60%	時間の確保 トレーニング 実際への活用

機会、場としてフォローアップ研修を位置付けることが可能である。即ち、フォローアップ研修の目的は、①指導者講習の継続教育、②実習指導の振り返り、評価の2点にあると確認できる。この目的を達成するための内容やプログラムを創意、工夫することが求められると言える。

研究者らの取り組みもこれらの観点から施行した2回の研修を振り返ってみるにより、表8に示したように研修の効果と課題が明確になった。今後は、いかに研修時間を確保し、限られた時間内で研修効果を上げるか、実際に活用し実践力を高めることを可能にする研修内容に工夫、改善するかにあることが示唆された。

V. 結論

今回の研修では、コミュニケーションスキルに関する講演に対して、約90%が高い満足と今後の活用感を示した。満足度には新しい知識を得たことが関連していることから、継続教育としての研修の効果が明らかになった。フォームの試用による事例分析に対しては60%が満足を示しその効果として、情報の整理ができる、アセスメントや問題点が偏らない、指導の具体策まで導き出せるなどが述べられた。しかし、活用への自信や可能性は低い評価であり、時間がかかる事などが指摘され、今後の研修課題として、限られた時間内の研修効果、実際に活用可能な研修内容が示唆された。

研究の限界：本研究は、一地域の対象約50名と言う限られた条件の中で進められ、事例分析フォームのはじめでの試用であること、現在、事例検討の方法論や妥当な検証方法が一般的に未確立な段階であり、結果の一般化には限界がある。

なお、本研究は、A県ナースセンター事業の受託および滋賀県立大学人間看護学部地域交流看護実践研究セン

ター共同研究助成に基づきA県看護協会および滋賀県立大学人間看護学部の共同研究として行った。

謝辞

本研究にあたり、A県実習指導者講習会後のフォローアップ研修会にご参加、ご協力くださいました皆様に深謝いたします。

文献

- 1) 厚生労働省：都道府県保健師助産師看護師実習指導者講習会実施要綱，平成6年。
- 2) 沖野良枝，米田照美，前川直美他：実習指導者講習受講後の実習指導案活用の現状と課題，第38回日本看護学会論文集－看護教育－，pp.63-65，2007。
- 3) 田原幸子，溝口満子，竹内佐知恵他：「保健婦・士」「助産婦」「看護婦・士」実習指導者講習会修了受講者の動向と講習会の効果、東海大学健康科学部紀要第6号，pp.87-92，2001。
- 4) 沖野良枝，米田照美，前川直美他：実習指導の持続・発展を目指すフォローアップ研修の試み，第39回日本看護学会論文集－看護教育－，pp.89-91，2008。
- 5) 沖野良枝，米田照美，前川直美他：実習指導者講習の継続・発展を目指すフォローアップ研修の効果，人間看護学研究7，pp.63-72，2009。
- 6) 佐藤光子他：看護教育における授業設計，医学書院，pp.111-114，2004。
- 7) 松木光子監修：看護学臨地実習ハンドブック，金芳堂，pp.8-15，1999。
- 8) 佐藤光子編著：わかりやすい指導案作成，教育メディア，pp.23-26，2002。
- 9) 延近久子編著：臨床実習指導のプロモーション，ユリス・出版部，pp.46-52，2002。
- 10) 田中耕治編：よくわかる授業論，ミネルヴァ書房，

(Title)

Exploring the Effect of the Follow-up Seminar
After the Regular Training Course for
Clinical Instructor to Nursing Students.

—Try to study a case in the clinical instruction using of an analysis form—

¹⁾Yoshie Okino, ²⁾Keiko Makino, Toshiko Fujii, ³⁾Tomoko Taniguchi, ⁴⁾Mitsuko Osumi

¹⁾School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

²⁾Shiga Japan Nursing Association

³⁾School of Nursing attached to Otsu Citizen Hospital

⁴⁾School of Nursing of the Otsu Red Cross

pp. 612-65, 2007.

Key Words Clinical Teaching Clinical Instructor, Follow-up Seminar for Instructor training, Form to analyze case